

【学会報告】

“2010 Spring Conference of the Korean Society for Gerontology and 10th Korea-Japan Gerontologist Joint Meeting”に参加して

遠藤 昌吾

東京都健康長寿医療センター研究所（東京都老人総合研究所）

老化制御研究チーム

本集会は2010年6月30日から7月2日の3日間にわたって、韓国大田（テジョン、DaeJeon）広域市にあるKRIBB(Korea Research Institute of Bioscience and Biotechnology)において行われた。

大田広域市は韓国の中央部に位置し、人口約150万人の韓国第5位の都市である。1973年に研究学園団地として指定された大徳研究団地には韓国科学技術院(KAIST, Korea Advanced Institute of Science and Technology)などの国立研究所やサムソン、LGなどの民間研究所が多数ある。私は見る機会がなかったが、韓国初のノーベル賞受賞者の銅像を設置するために“台座”のみが既に用意されているという。韓国の人々が科学に寄せる大きな期待を感じる。日本における筑波学園都市構想と類似の都市構想であるが、異なるのは、大田市には韓国の首都機能の一部（政府の11の機関）が移転されている事であろうか。1993年には科学EXPOが大田市において開催され、2004年には日本の新幹線にあたるKTX(Korea Train eXpress)が開通した。筆者は、大田ーソウル間の1時間弱、KTXの300km/h走行を期待してデジタルの速度計を見ていた。最高速度は304km/h、300km/hを越えていた時間は3分40秒間であった。

韓国の老化学会集会は春と秋に年2回開かれ、今回、春の集会に合わせて日韓老化研究者ジョイント集会が開かれた。このジョイント集会は日本と韓国で交互に開かれており、次回は2011年の日本基礎老化学会の折に開かれる予定である。

今回の集会参加者は150人ほど、小さいが活気にあふれる集会だった。本年6月中旬に開催された日本基礎老化学会と比較すると、韓国の集会参加者の平均年齢はは

るかに低く、韓国の老化研究者の若い層の厚さを感じた。30題ほどのポスターから優秀ポスターが3題選ばれ、若い研究者たちが賞状と金一封をはにかみながら受け取っていた。集会の口頭発表は日韓ジョイント集会があてられた。日本からは、東海大学の石井直明団長のもと、講演者として（発表順、以下敬称略）、石井孝昌（東海大学）、森望（長崎大学）、下川功（長崎大学）、遠藤昌吾（都老人研）、田中雅嗣（都老人研）、小松利光（長崎大学）、川上恭司郎（順天堂大学）、丸山光生（国立長寿研）、森秀一（都老人研）が、そして、ポスター発表で宮沢正樹（東海大学）が参加した。

日本基礎老化学会がそうであるように、研究発表は多岐にわたり、モデルも線虫からヒトまで、研究内容は酸化ストレス、栄養、カロリー制限、認知機能など多様であった。韓国の若い研究者の英語そして質問への対応は口頭、ポスター発表とも見事であり、よく訓練されていた。口頭発表では留学帰りの研究者たちが多い事もこのことに寄与していたと思う。

今回は、ジョイント集会が10回目を迎える節目にあたり、後藤佐多良先生（欠席）、Dr. Byung-Pal Yuに対して、永年の日韓老化研究交流への尽力を讃える表彰が行われた。後藤先生やDr. Yuをはじめとする研究者たちが築き上げた日韓交流という貴重な財産に心から感謝するとともに、この財産を着実に増やそうという気持ちを胸に、帰途についた。

世界の2大“超”老化大国、日本と韓国が協力し老化研究を先導していくことは、この分野の研究にとってきわめて重要である。来年日本で行われるジョイント集会で韓国の研究者たちに会い、議論するのが楽しみである。